方法の発露
－批評空間創出のための理論と実践－〈研究会報告〉
Artworks Structurized by Characteristic Methods
－Theory and Practice to create a Space to provide Critiques－

山本　健史　YAMAMOTO Takeshi（研究メンバー代表）
橋本　真之　HASHIMOTO Masayuki
横山　勝彦　YOKOYAMA　Katsuhiko
森　　仁史　MORI Hitoshi
田中　信行　TANAKA Nobuyuki
高橋　明彦　TAKAHASHI Akihiko

はじめに

・これまでの経緯

本研究は2012年と2014年に埼玉県で開催された展覧会「方法の発露」の問題意識を継承するものである。2012年の展覧会を企画した橋本真之はその意図を方法の発露展フライヤーに記している。「現代の造形行為に根源的なるものを求めたとき、その方法が造形自体を形成することはもとより、その世界の構造を形成している事例を見出すことができる。そこには最初にイデア在りきという世界と対極にある造形世界がある。虚心にそれらの作例を見れば、それが人間の造形行為の根幹に関わることだということが見えてくるに違いない。」この掲載文章から明治期以降の西洋美術受容に対する批評性を持って始まった展覧会であることが理解できる。

また2014年の展覧会において企画を担当した藤井匡（東京造形大学准教授、学外研究協力者）は制作者と鑑賞者の立場の差異を前景化するものとしての「ジャンル」に注目し、すでに知られている素材や技法を誰も想定しなかった解釈で再発見することにより生まれる表現について考察し「方法」とは個人に立脚するものであるとしている。

以下３点の画像はいずれも「方法の発露2014－ジャンルの根拠－」会場風景。

［キーワード］造形表現研究　批評研究　地域性

・2015年からの研究計画

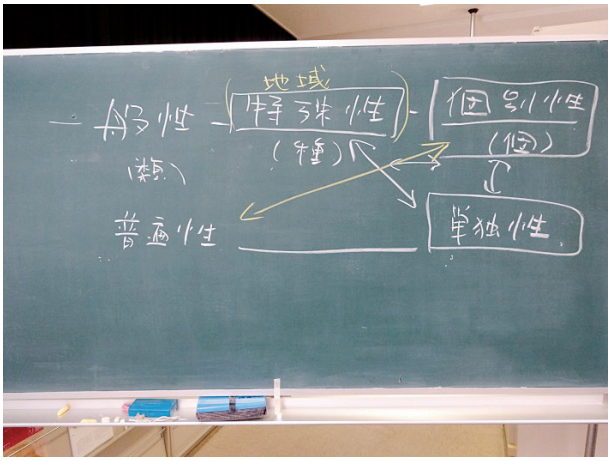
本研究は平成27年度金沢美術工芸大学特別研究として採択され、２か年計画で研究を進めていく。本研究では美術分野における日本の独自性を活かした造形表現行為について考え、現在進行中の制作活動を分析し新たな表現の可能性を模索しその結果を展覧会で発表する。さらにその後、表現研究の範囲にとどめることなく批評研究にまで広げることで美術表現に対する批評活動を一般の観覧者に浸透させ、金沢に批評空間を創出させることを目的とする。

平成27年に北陸地域の造形作家の活動状況を中心に調査研究を行ってきた。同時に研究会を通じて現代における日本の問題意識を探った結果「金沢における地域性と個人性」というテーマを得、平成28年６月に造形表現作品の展覧会を藤井匡（前出）・外舘和子（工芸評論家、学外研究協力者）のキューレションにより“しいのき迎賓館ギャラリーＡ及びギャラリーＢ”において行うことを決定した。あわせてインターネット上でも作品公開をすることにより広く世界に発信する。その後展覧会出品作品への批評を募ることで評論活動は特定の人だけが行う特殊な取り組みであるという概念を払しょくし、一般の観覧者にも批評への参加を促すことで美術作品にたいする見方や考え方を根底から刷新させる。寄せられた批評文は編集したうえで批評集として出版する計画である。

研究会報告

第１回研究会を平成27年６月10日に開催した。冒頭「地域性」というキーワードから始まった研究会は金沢における造形表現の固有性や方法に焦点を当てた議論が進んだ。その場で提案された展覧会テーマは「金沢における地域性と個人性」であった。議論の中で（1990年代以降のグローバル資本主義の展開の中で）特殊性が成り立たなくなっていること、その代替えとしてフィクションとしての特殊性（例えば「工芸王国」というブランド化）や普遍性と個別性が直接的に結合する状況にあることが藤井匡により指摘された。（参考：柄谷行人「単独性と特殊性」『探究Ⅱ』講談社1994）

下図参照



展覧会企画の視点からは「種から入って個を見るのか、個を選んで種を見るのか」といった順序についての意識も共有する必要があるとの意見もあった。

最後に藤井匡と外舘和子がキュレターとして展覧会に対する基本的な考え方の意見交換を行った。

藤井から“方法と形態（機能や装飾も同時に考え

る必要が出てきたが）の関係性の問題につぃて、1960年代末のアンチ・フォーム＝プロセス・アートでは、積極的な形態を求めなかったこととプロセスが前景化してきたことが関係している。形態の問題を一切排除するわけにはいかないとしても、この問題を考えおく必要があると思っていた。”
この指摘に対し外舘は“私としては最終的な「かたち」のある作品（作家）を挙げていきたいと考えている。かたちを通して鑑賞者が一種の追体験の要求を感じるような作品、とでもいうべきか。勿論、そうした「かたち」のある作品を相対化するために藤井さんがプロセスアート的なものを挙げてくることは拒みません。”との考えを示した。
また人選の際の世代に関する考え方として藤井は“地域性を考える上で「継承」（時間的連続性）を考える必要があるかどうかということを考えている。地域性を共時的に見出すか、通時的なものを含めて見出すか、という観点も必要ではないか。”との考えに対し外舘は“継承というか、変化あるいは批判的継承も含め、作家の世代を狭めないことに賛成である。30前後から60代まで、10名のうちに含まれることを希望する。”としている。

分業による制作に関して版画を引き合いに出したうえで藤井は“分業制の問題を考えたかった。私の考えでは「方法」は分業制とは結びつかない。「方法」は継承されない＝共有されないものだから。ただ、それを超えるような「方法」のあり方が存在する可能性はあると思う。”との考えを示した。外舘も“私も基本的に分業制作の作品を想定していません。これまで現代工芸のコアとして私が主張してきた「素材や技術に根ざした実材表現　hands-on art based on material & process」の作品（作家）を挙げていきたいと思っています。との考えを示した。

造形言語の力を問う展覧会にしたいとの認識において藤井は“「もの」（制作にとっての素材と鑑賞者にとっての作品の両方があると思う）が主導権をもつような考え方を提示するために制作者（主体）と素材（客体）を分離した上で展開される関係とは別の考え方ができないだろうかと思っている。”とし、それに対し外舘は“基本的に造形言語の力を主体に語りうる作品を想定している。”との考えを示した。

外舘は展覧会企画を進めるうえでの基本的な考えとして、地域で個人がどう戦いうるか、個を主張しうるか、地域のもつ「磁場」のようなものの中で、作家が自らの方法を、より確かなもの、堅牢なものにしていくという姿に関心がある。よって、外から金沢に入ってきて制作している作家を積極的に取り上げたいという思いがある。”とした。
また藤井は“橋本真之の提示した「方法」から出発するならば、「金沢における地域性」とは金沢を交通の結節点として考えることを意味する。現在行われている多種多様な交通を「金沢における地域性」とするのである。それは、ある特定の様式やメディウムや図像に収斂するものではない。「方法」を通して地域性を考えるとは、個人性の問題から出発するより他はないのである。”としている。

第２回研究会を同年10月12日に開催した。
「手」の問題に始まった。イデアから手法や材料の有効性を探ってきたのがモダニズムの流れだがモダニズムの崩壊により手法や材料からイデアを探る運動に置き換わってきている。ただしそれを対立構造として理解するのではなくその世界をどこまで高められるかが現在問われている。

「手」のパワーは現在日本で注目されている。鉄塊を玄能で叩くことで制作を続けている多和圭三氏を例として、ハンマーをふるうこととイデアが無関係ではないこと。時としてイデアに導かれる「手」ということもあるのではないか。「手」は偶然性を孕んでいてイデアを破壊することもあり、その結果物質の持っている必然性をあらわにするものであるという指摘があった。

また現在、技術開発が進み様々な制作現場で導入が進んでいる３Ｄプリンターの有効性を認めつつも、制作プロセス自体を機械にゆだねることの危険性への指摘もあった。

その後藤井匡から展覧会に対する方向性の提示が

あり、そのキーワードとして「交通」があげられた。“金沢の工芸の起源としてしばしば言及される「百工比照」。江戸時代前期から中期にかけて前田家によって集成された各種工芸の見本や模造品、模写などである。ただし、この「百工比照」が起源であるとしても、金沢という土地と結びついたものであるわけではない。特に「第一号箱　第一架帙　紙類」に明確に示されるが、採取された紙見本は日本全国の土地のものに及んでいる。「百工比照」が金沢工芸の起源であるとするならば、それは金沢の土地の特性に依存するものではなく、人間や物品の移動によって形成されたといえるだろう。つまり、金沢工芸の起源には交通こそが存在するといえるのだ。”としている。（参考：『開館十周年記念特別展－前田育徳会の名宝－「百工比照」』石川県立美術館1993）
地域性は常に揺らいでおりそこにレッテルを貼ることである瞬間を固定させるという意味がある。仮に統一感をなくすような展示になったとしてもそこには意味があるのではないか。具体的には全作品フロアピースとしたいことと「手」の問題は強く意識しているという考えが示された。
続いて外舘和子からは地域のエネルギーを重視し、世代を限定せず人選を進め、展示方法はフロア・展示台・外の空間とあらゆる可能性を排除せず考える意向が示された。特に工芸的な作品からのアプローチを考えているとの意向が示された。
会場はしいのき迎賓館ギャラリーＡおよびＢにすでに決定しているが、キュレター二人に対してどのように振り分けるか議論を行った。それぞれの考え方を観覧者に理解しやすくするという意味で部屋を分け、ギャラリーＡを外舘和子、ギャラリーＢを藤井匡が担当することとした。

（やまもと・たけし　工芸科／陶磁）
（はしもと・まさゆき　大学院／金工）
（よこやま・かつひこ　大学院／芸術学）
（もり・ひとし　柳宗理デザイン研究所長）
（たなか・のぶゆき　工芸科／漆芸）
（たかはし・あきひこ　一般教育／文学）

（2015年10月30日　受理）